

# 「平庄株式会社」 ～水産業の復興めざし最新鋭の食品工場～

平庄株式会社は、本社がある釜石市を拠点として水産卸売業を中心に営業しています。グループ会社は、北海道や千葉、神奈川県内にあり、全国規模で水産業に携わっています。

多くの種類の魚を取り扱っており、中でも多いのがサンマです。大槌、釜石地区では、サンマの取扱量が最多です。郵便局の「ゆうパック」で全国へサンマを直送し、好評を博しています。

東日本大震災では、本社の1階部分が全壊し、浜を支えようという意気込みで復旧を急ぎました。平成23年5月には部分操業を開始して7月には完全復旧させ、震災のその年の秋のサンマの水揚げに対応し、地域水産業の底支えに貢献しました。

平成24年には大槌町への食品工場建設を決めました。計画時、建設予定地は、まだ工場を建設できる状況ではありませんでした。しかし、大槌町の水産業を復興させたいという強い思いから建設を決定しました。

大槌食品工場は安渡地区の魚市場に近い場所に建設され、平成26年3月に操業を始めました。最新の設備が整えられ、作業場は部門ごとで区切られて衛生管理にも力が入られた最新鋭の工場です。不足気味だった従業員は徐々に増え、和気あいあいと仕事に取り組んでいます。サケの盛漁期を迎えた大槌食品工場は、これから更なる飛躍をめざします。

平庄の平野隆司社長は「今後は大槌町の工場で最終加工まで行い、刺身などの商品を生産し、加熱処理をした食品も扱っていくことにしています。また、地元メーカーとして地産加工を行い、県内外への出荷を積極的に進めて行く方針です」と抱負を述べています。



大槌食品工場でサケの加工作業を行う従業員  
＝大槌町安渡

本社  
〒026-0002 釜石市大平町4丁目1-25  
TEL 0193-22-1097  
大槌食品工場  
〒028-1105 大槌町安渡3丁目226  
TEL 0193-55-6056

## さけます第2ふ化場が完成～2千万尾放流可能～

大槌町の秋サケ定置網漁を支える、さけますふ化場の第2ふ化場が11月11日、第1ふ化場に続いて復旧し、目標の2千万尾の稚魚を放流する体制が整いました。第2ふ化場は、自動掃除機や防鳥獣ネットを備えた最新鋭の飼育水槽が38基あり、1千万尾を生産できます。平成24年に復旧した第1ふ化場の1千万尾と合わせて2千万尾生産できる規模のふ化場が完成したことになります。この施設で育った稚魚は来春、放流され、3年～5年かけて母なる大槌川に戻ってきます。この日の竣工式では碓川豊町長が「震災の影響でサケ漁が心配されているが、2千万尾放流が可能になり、将来の水揚げが期待できる」とあいさつし、

ふ化場の指定管理者、新おおつち漁業協同組合の阿部力組合長は「大槌川、小釜川に震災前のようにサケが戻り、水産業の町・大槌の復興の原動力になるよう努力したい」と決意を語りました。



最新鋭の設備を整えた大槌町さけます第2ふ化場

おおつちさいがいエフエム  
パーソナリティー  
金崎伊保子さん (63)

ラジオを聞く人の心の栄養にふとラジオから耳に入る温かい大槌弁。話し手は、おおつちさいがいエフエムパーソナリティーの金崎伊保子さん(63)。担当する「しゃべってしゃべって」や「大槌の話しっこすっぺし」などが人気番組です。

震災後、知人からの「アナウンサーを募集しているからやってみたら？」の一言で始めた現在の仕事。顔見知りが多く、取材といってもあまり緊張しなかったそうです。

「初めのころは、各地域にバラバラになってしまった町内の人たちが、ラジオを通して、またつながりが出来るといいなと思っていました。また、塞ぎがちな気持ちも誰かの声を聞くことで元氣になれたらいいな、と思っていました」と金崎さんは振り返ります。

被災者それぞれの状況がますます多様になっていく現在の被災地。不安を抱える人の、誰にも言いえない心の奥底にあるものを拾い上げて届けたい、そして一歩でも踏み出せるきっかけになってもらえたら、という思いが強くなっていると言います。



番組収録中の金崎伊保子さん

「この仕事を始めてうれしかったことは、スタジオで話してくださった方々が、明るい笑顔になって帰って行くことです。話すことで少しでもすっきりした気持ちになってくれるとうれしい」

震災後、他県から支援に来てくれる方々と接していろいろな考えを持つことが出来たと言います。

「これからは地方が面白くなる時代になると感じています。いい番組、というのも大事ですが、地域に密着した大槌のためのラジオで、聞く方々の心の栄養になればと思っています」と笑顔を見せました。

## 「復興を支える人 支える団体」

大槌町青年団体連絡協議会

若い人の背中を押す団体に

昭和50年代に、町内のそれぞれの地域にあった青年団の窓口として発足し、活動を続けてきました。震災前は、地域に伝わる人形劇や演劇などを上演し、東京・日本青年館で開かれる全国青年大会で披露してきました。また、クリスマスに子どもたちへプレゼントを届ける「出張サンタクロース」も記憶に新しいところです。

震災後は団員不足で一時活動を休止していましたが、2012(平成24)年に入って再開しました。小釜地区にある絆ハウス内に拠点を置いています。団員は十数名。「この町を好きになってもらう、この町の魅力を再発見する」をめざして、毎週、定期的に集まり、活動内容を論議し、団員以外の若者も加わって親睦を深めています。

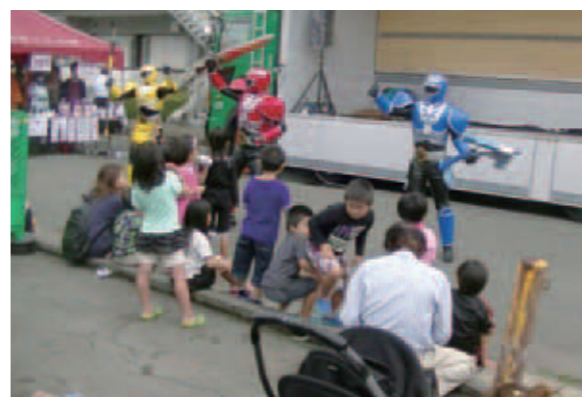
「震災後に発足した防災戦隊・ホウライオーで、防災の啓蒙に努めています。南海トラフ地震が心配されている今、ホウライオーの防災色を一層、強めたいと思っています」と会長の川端雄貴さんは話します。

ご当地ヒーローのホウライオーは2012年に誕生。ホウライレッド、ホウライブルー、ホウライイエロー、

といったキャラクターを用い、町内外のイベントで防災を親しみやすく説明しています。

また、今年の七夕には、絆ハウス敷地内で仮設住宅の子どもたちを対象に、読み聞かせみや花火などを楽しみました。

川端さんは「これからは、若い人が楽しめるイベントも開催したい。青年層を支えるのは誰だ?となったとき、僕たちじゃないかな、と。若い人の背中を押すような、そんな団体でありたいと思っています」と話しています。



盛岡市で開かれたイベントで登場したホウライオー

〒028-1121  
大槌町小釜第7仮設  
TEL 090-5557-4479